教皇領都市オルヴィエートと教皇庁における教会改革
―オルヴィエート大聖堂サン・ブリツィオ礼拝堂装飾再解釈―

九州大学大学院人文科学府博士後期課程　森 結

オルヴィエート大聖堂サン・ブリツィオ礼拝堂は、15 世紀中葉から 16 世紀初頭にかけて大聖堂造営局から複数の画家に装飾事業が委託された礼拝堂である。ルカ・シニョレッリによる装飾事業期（1499-c.1504）には「最後の審判」連作である壁画群が描かれ、《アンチ・キリストの説法と行ない》や《世界の終わり》といった当時の世紀末という時代に呼応した、希少な主題が描かれた。この壁画群の解釈にあたっては、オルヴィエートが教皇領都市であったことから、当時のローマ教会及び教皇庁の危機と関連させて解釈する向きと、委嘱主が市当局の官吏で構成された大聖堂造営局であることから、あくまでオルヴィエートにおける文脈から解釈する向きとに二極化しており、議論は平行線を辿っている。

発表者は以前、本礼拝堂腰壁装飾に、教皇庁の要人に好まれたピントゥリッキオ工房による古代風装飾が意図的に導入されていることを指摘した。当時のオルヴィエートの大助祭アントニオ・デリ・アルベリは、後にピントゥリッキオを庇護し教皇ピウス 3 世となるフランチェスコ・ピッコローミニ枢機卿の秘書を兼任していた人物であり、この枢機卿の古代趣味がアルベリによって本礼拝堂に再現されたことを論じた。本発表においても、ピッコローミニとアルベリとの人間関係を中核として、本礼拝堂の壁画連作を考察することをその旨とする。

まずは本礼拝堂装飾事業に長きに渡って介入していたオルヴィエートの有力氏族、モナルデスキ家とピッコローミニ家が縁戚関係を結んでいたことに注目し、この縁故がオルヴィエートを確固たる教皇領都市へと導き、また同時にオルヴィエートと教皇庁の関係危うくしたということを新たに指摘する。フラ・アンジェリコによる本礼拝堂装飾事業期（1447）からモナルデスキ家は事業に介入しており、シニョレッリの装飾事業においては一部出資がなされた。このように都市政治的背景からも、ピッコローミニに追従するような壁画装飾が描かれることには意味があったといえるのである。

次に《アンチ・キリストの説法と行ない》を含む「最後の審判」連作壁画群の出典と、その意義について論じる。1990 年代の本礼拝堂の大規模修復以降、先行研究は壁画群の出典を聖アウグスティヌスの著作であり、終末を論じる『神の国』と関連付けて解釈してきた。しかし都市的文脈から論証されてはおらず、本発表ではこれを考察したい。

『神の国』は人類の歴史を「地上の国」と「神の国」の二つの歴史として論じる著作であった。オスマン・トルコの脅威に晒された当時の教皇庁は、組織の改善や公会議の設置を求める教会改革に向けて動いていた。ピッコローミニも改革の必要性から教会の歴史に関する著作を収集しており、その中には『神の国』の写本も認められる。他方で彼はローマの人文主義者たちからも教会史や教会法に関する著作が献呈されており、同様の著作はアルベリの蔵書にも認められる。よってアルベリは、ピッコローミニとの関係を核として、教会が地上における神の国を体現していると説く『神の国』を出典とする壁画群を本礼拝堂に描かせることで、教皇領となりようやく半世紀を向かえたオルヴィエートから、教皇庁への忠誠の意を示そうとしたと結論したい。